



昭和五十二年七月七日 発行

定価一三八〇円

■春・夢二童話集■

著 者 竹久夢二

発行人 山本一哉

発行所 ノーベル書房株式会社

東京都新宿区西大久保一の四三三 西北ビル

電話二〇〇一〇一六九

電二一六〇

印刷所  
製本所

凸版印刷株式会社

# 春

竹久夢二

童話集

ノーベル書房

## はし が き

少年達のため挿繪をかきながら、物語の方も自分でかいて見やうと思立つて、その頃まだ私の手許から小學校へ通つてゐた子供をめやすにかいたのが巻頭の數篇です。中學へ通ふやうになつた時、「誰がいつどこで何をした？」をかいて見せました。これはフキリップがお手本になつたのですが、「都の眼」の留吉にしても「たどんの與太さん」の與太郎にしても、みんな私自身の少年の姿です。「日輪草」の熊さんも私の姿に違ひありません。あとの方のお話は、雑誌の挿繪にそへたもので、少年の頃見たり聞いたりした話を思出してかいたのです。

妹姉篇「凧」に對して「春」といふ一字を撰んだのです。「春」といふ字は音が朗かで字畫が好もしいため、本の名にしたわけです。

都<sup>みやこ</sup>

の

眼<sup>め</sup>



## 都みやこの眼め

留吉とめきちは稻田いなだの畦あぜに腰こしかけて遠い山やまを見てゐました。いつも留吉とめきちの考かんがへることでありましたが、あの山やまの向むかふに、留吉とめきちが長いこと行いつて見みたいと思おもつてゐる都みやこがあるのです。

そこには天子様てんしさまのお城しろがあつて、町まちはいつもお祭まつりのやうに賑にぎやかで、町まちの人達ひとたちは綺麗きれいな服ふくをきたり、うまいものを食たべて、みんな結構けつこうな暮くらをしてゐるのだ。欲ほしいものは何なんでも得えられるし、見みたいものはどんな面白おもしろいもので、いつでも見みることが出で来るし、どこへゆくにも電でん車しゃや自じ動どう車しゃがあつて、

ちよつと手を舉げると思ふところへゆけるのだ。

おなじ人間に生れながら、こんな田舎で、朝から晩まで山ばかり見て暮すのはつまらない。いくら働いても働いても、親の代から子の代まで、いやおそれくいつまでたつても、もつと生活がよくなることはないだらう。牛や馬の生活と異つたことはない。たとへ馬であつても都で暮して見たいものだ。廣い都のことだから、馬よりはすこしはましな生活が出来るだらう。留吉はさう考へると、もうちつとしてゐられないやうな氣がするのでした。それから三日目の朝、留吉は都の停車場へ降りてゐました。繪葉書や雑誌の寫眞で見て想像はしてゐたが、さて、ほんとうに都へ來てみると、どうしてこんなに澤山な人間が、集つてゐるのだらう、そしてなんのためにこの大勢の人間は忙しさうにあつちこつちと歩いてゐるのだらう。ちよつと立つ

てゐる間にさへ、自動車<sup>じどうしや</sup>が二十臺<sup>だいい</sup>も留吉<sup>とめきち</sup>の前<sup>まへ</sup>を走<sup>はし</sup>つてゆきました。

唐草模様のついた鞆<sup>かばん</sup>一つさげた留吉<sup>とめきち</sup>は、右手<sup>みぎて</sup>に洋傘<sup>かうもり</sup>を持<sup>も</sup>つて、停車場<sup>ていしやぢやう</sup>を出<sup>で</sup>て歩<sup>ある</sup>きだしました。

「おいおい危<sup>あぶな</sup>い！」腕<sup>うで</sup>に青<sup>あを</sup>い布<sup>きれ</sup>をつけた巡査<sup>じゆんさ</sup>がさう言<sup>い</sup>つて、留吉<sup>とめきち</sup>を電車線<sup>でんしやせん</sup>路<sup>ろ</sup>から押<sup>お</sup>しだして、路<sup>みち</sup>よりもすこし小高<sup>こだか</sup>くなつた敷石<sup>しきいし</sup>の上<sup>うへ</sup>へ連れていつて、

「電車<sup>でんしや</sup>に乗<sup>の</sup>るなら、ここで待<sup>ま</sup>つてゐて下<sup>くだ</sup>さい」と言<sup>い</sup>ひました。

そこには立札<sup>たてふだ</sup>があつて「帶地<sup>おびち</sup>全<sup>ま</sup>く安<sup>やす</sup>し」と書<sup>か</sup>いてあるのです。留吉<sup>とめきち</sup>は「呉服屋<sup>ふくや</sup>の廣告<sup>くわうこく</sup>だな」と思<sup>おも</sup>ひましたが、帶地<sup>おびち</sup>の安<sup>やす</sup>いことは留吉<sup>とめきち</sup>には用<sup>よう</sup>のないことでした。それよりも今夜<sup>こんや</sup>留吉<sup>とめきち</sup>はどこへ寝<sup>ね</sup>たら好<sup>い</sup>いだらうと考<sup>かんが</sup>へました。

留吉<sup>とめきち</sup>は、小學校時代<sup>せうがくかうじだい</sup>の友達<sup>ともだち</sup>で、村長<sup>そんちやう</sup>の次男<sup>じなん</sup>がいま都<sup>みやこ</sup>に住<sup>す</sup>んで好<sup>よ</sup>い位置<sup>ゐち</sup>を得<sup>え</sup>てくらしてゐることを思<sup>おも</sup>ひだしました。

卒業試験の時、算術の問題を彼に教えてやつたことがあるから、訪ねてゆけば、彼もあの時の友情を思出すに違ひない。留吉は、昔馴染の友達の住所をやつと思出しました。

そこは山の手の高臺で、門のある家がずらりと並んでゐるのでした。

二十四番地、都は掛値をする所だから、なんでも半分に値切つて、十二番地、だなんて、村で物識の老人がいつか話してくれたのを思ひ出したが、まさかそれは話だと、留吉は考へました。

さて二十四番地はどこだらう。

細つこい白い木柵に、紅い薇薔をからませた門がありました。石を疊みあげてそのうへにガラスを植ゑつけた塀がありました。またある所には、まるで西洋菓子やうにべたべたいろいろな色のついた、ちよつと食べて見た

いやうな西洋風な家もありました。紅い丸屋根をもった、窓掛の桃色のお伽噺の子供の家のやうな家もありました。

二十四番地！さあここだぞ。今田時雄、ああこれだ、これが昔の友達、時公の家だ。白い石の柱が左右に立つて、鐵の飾格子の扉のやうな門がそれでした。まるで郡役所のやうな門だなど、留吉は考えました。

門からずつと玄關まで石を敷きつめて、兩側に造花のやうな舶來花を咲かせてありました。

「時公もエラクなつたもんだな、算術なんかあんな下手糞でも、都へ出るとエラクなれるものだな」留吉は、昔の友達の間をはいつて、玄關の方へずんずん歩いてゆきました。

すると、なんだか變てこな心持が、留吉の心をいやに重くしはじめました。

變だぞ、留吉は生れてはじめて、こんな厄介な氣持を経験したので、自分にははつきり解らないが、留吉はすこし氣まりがわるくなつたのです。それはたいへん留吉を不愉快にしました。

「時公におれは竹馬を作つてやつたこともあるんだ、あいつはその事もまだ覚えてゐるだらう」

この考は、留吉をたいへん氣安くして、元氣よく玄關の前まで、留吉を歩かせました。「御用の方はこの釦を押されたし」と柱の釦のわきに書いてある。留吉は讀みました。

「おれは用があるのだ。それにここの主人はおれの友達だからな」留吉は釦を押した。ヂリヂリヂリとどこか家の奥の方で音がしました。さういふ仕かけかなと思つて、留吉は、入口のガラス戸のそこを見てゐますと、そこ

に一寸角すんかくほどの穴あながあいてゐます。そこで大きな一つ眼めがぎらつと光ひかつたかと思ふと、頭あたまの上でヂリヂリヂと、舶來はくろの半鐘はんしやうのやうな音おとがしました。留吉とめきちはもうとてもびつくりして、何を考かんへる暇ひまもなく、どんどん門もんの方ほうへ駈かけだしました。

するとその拍子へうしに、留吉とめきちの帽子ぼうしが留吉とめきちの頭あたまから飛去とびさつて、ころころと轉ころがつてゆきました。こいつは大變たいへんだと思おもつてゐると、悪い時わるいときには悪いことがあるもので、造花つくりよなの西洋花せいやうはなの中から、齒はをむいたチンのやうな顔かをした、しかしずつと愛嬌あいけうのない大犬おほいぬが出てきて留吉とめきちを追おひかけました。

留吉とめきちは、十一番地はんちのどこまでまるで夢中むちゆうで駈出かけだしました。やれやれとそこで立どまると、あとから今田家いまんけと襟えりを染めぬいた法被はつびをきた男おとこが、留吉とめきちの帽子ぼうしを持もつて立たつてゐました「どうも、これはお世話せわをかけました」と言いつて

留吉がその帽子を受取らうとしますと、その手をぐつとその男は掴んで「ちよつと来い」と言つてペンキ塗の白い家へ連れてゆきました。椅子に腰かけた人間の眼が十三ほど、一度にぎろつと留吉の方を見ました。それは調査でした。

「先程電話でお話のあつたのはそいつですね」一人の巡査が立つてきて、法被の男に言ひました。

「こいつですよ、旦那」法被の男が言ひました。

「私はその、なんにも悪いことをしたのではないですよ。その、私は、その、昔の友達を訪ねていつたですよ、ただその、眼が、眼がそのヂリヂリヂリつと言つたでがすよ」留吉は巡査に言ひました。巡査は髭を引張つて言ひました。

「お前は今田氏の昔の友達だと言ふのだね。それに違ひないか、何といふ名だ」。

巡査は今田氏へ電話をかけました。

「ははあなるほど、昔の友達などと當人は申して居りますが……ははあ、いやわかりました。では、とりあへずですな、外に窃盜などの目的はなかつたものと推定して、放免することにいたしませう。……はい……はい、どうもお手数をかけました。」チリンチリン

電話をかけ終つた巡査は、また留吉の方へ出て、さて言ふには、

「今田氏はお前のやうな友達を持つたことはないと言言るよ」

「今田時雄は、その、算術の試験の時……」

「もう好い、兎に角この帽子はお前に返してやるが、今後は、他人の邸宅へ

無斷で侵入しては相ならぬぞ、よしか」

留吉は、とある公園のベンチに腰かけて、つくづくと帽子を眺めました。

この帽子が悪いのだ。とにかくこの帽子は、おれを今よりもつと不幸にするかも知れない。田の草をとる時にも、峠を越す時にも、この帽子はおれの連だつたが、今は別れる時だ。留吉は、帽子を捨てしまはうと決心しました。そこで、腰かけてゐたベンチの下へ、その帽子をそつとかくして、そこを立ちさりました。公園の門を出て二三間歩くと、

「おいおい」と言つて巡査が追ひかけてきました。

「これは、君のだらう」と言つて、帽子を留吉に渡しました。

「いや、その、これはその……」留吉が、何か言はうとするうちに、もう巡査は、ほかの帽子か何かを探しにいつてしまひました。

留吉は、不幸な帽子を手に持つて歩いてゐるうちに、たいへん腹がへつてきました。

「民衆食堂一食金十銭」と書いてある西洋館がありました。留吉は、そこへ這入つていつて、隅つこのあいた椅子に腰かけて、帽子を卓子の上へおきました。

十銭の食事が終ると、留吉は帽子を椅子の下へかくして、何食はぬ顔をして、出てきました。「君の帽子だらう」あとから食堂を出てきた車屋さんが、すつぽりと留吉の頭へ、帽子をはめてしまひました。

留吉は、長い間こがれてゐた都を見物することも、何か仕事を見つけることも、また昔のお友達を思出すことも忘れてしまつたやうに見えました。ただもう、どうして、この不幸な帽子と別れたものかと、その事ばかり考へ